



開業からの1年間を振り返って

みやぎ内科循環器科ファミリークリニック 院長 宮城 淳



平成21年7月、医師となって20年目の節目の年に浦添市に「みやぎ内科循環器科ファミリークリニック」を開院した。その頃はちょうど新型インフルエンザの流行とも重なり、その対策に追われながら、慣れない経営、人事や診療体制を整えていくのに必死であった。インフルエンザの鎮静化と共に診療所業務にも慣れ、何人かの職員の入れ替わりはあったが、何とか落ち着いた状態で一周年を迎える事が出来た。本稿では開業から1年までを振り返っての感想を本音も交えて書いてみたいと思う。少しでも若手医師の進路や日常診療の一助になれば幸いである。

私の場合、開業までに要した期間は着工から五カ月、準備期間を入れてもわずか十カ月という超過密スケジュールであった。開業予定日には薄氷を踏む思いでなんとか間に合った。勤務の合間を縫って建物の設計や医療機器の選定など打ち合わせをしながら出来上がっていく過程は充実した時間であったが、もっとゆとりを持って計画すべきだったと反省している。開業当時、先輩医師から「開業して1年目はどうせ外来は暇だからどうやって暇をつぶすか考えておいた方がいいよ。」とアドバイスを受けた。最初は他人事のようにピンと来なかったが、しばらくすると身につまされる思いがした。朝から張り切って準備をしても院内が開店休業のように閑散としている時はさすがに落ち込んでしまうが、その先輩の言葉を思い出し何度も救われた気がする。

私の勤務医時代の経歴で良かったと思えたのは、公立病院退職後、診療所勤務を経て開業し

た事だ。10年間那覇市立病院で循環器内科医として勤務した後、開業までの5年間を「こくら台ハートクリニック」(大城康彦院長)で副院長として働かせて貰った。そこでは循環器診療のみならず、内視鏡検査や透析診療も経験をする事が出来た。また、外来では小児から老人まで色々な科にまたがる多彩な疾患を診る事ができ、開業医に必要なプライマリケアを学ぶ事が出来た。大城康彦先生には開業に必要な知識を教えて頂きこの場をお借りして感謝申し上げます。

私のクリニックでは外来診療と並行して在宅医療をやっている。開設と同時に在宅支援診療所の申請を行い、今は平日午後の休診日を利用して訪問診療に出かける。在宅医療は具合が悪くなった患者に対して行う往診(臨時往診)とは異なり、計画的に月に二回の定期往診(訪問診療)を行い、さらに患者の急変に対して24時間対応するというものである。行政が療養型病床を減らし在宅を推し進めているため、今後も在宅医のニーズが高まると予想される。在宅医療に参入するメリットとしては、地域医療に貢献できる、安定した収入に繋がる(在宅の診療報酬は高めに設定されている)などである。しかし、24時間対応となるとどうしても抵抗があり尻込みしてしまう。当院が本格的に在宅医療を開始したのは開業後3ヶ月経過してからであるが、その頃から診ているTさんを紹介したいと思う。Tさんは高血圧と軽い脳梗塞の既往を持つ認知症の進行した95歳の女性である。娘、孫夫婦と同居し、娘が介護の中心で介護サービスとして週に5日のデイサービス、2ヶ月に1~2回のショートステイを利用している。最初の

頃、往診に行くと、バイタル測定や診察を拒絶し、嘔んだり唾を吐いたりすることがあった。しばらくして、自宅で転倒して大腿骨頸部骨折で入院。保存的治療で何とか退院したのも束の間、今度は腸閉塞で緊急入院し手術を受けることになった。最初の入院時、病室を訪問した事があったが、呼びかけにも無表情でリハビリも拒否、食事あまり摂らないような状態であり、在宅での療養は厳しいのではないかと考えた。しかし、家族や周りの強いサポートのおかげで二度の困難を乗り越え、再び在宅に戻ってきた。隔週で、デイサービスから帰った頃に訪問しているが、家にいると表情も豊かで曾孫が一緒だと機嫌がよくなるらしく、最近では血圧も素直に測らせてもらえる事が多くなった。認知症のため言葉には出せないが、Tさんは体全体で自宅

で生活できる喜びを表現しているように思う。このような体験が在宅医療へのやりがいを感じさせてくれる。浦添市には医師会を中心とした在宅医療ネットワークがあり、情報交換会や一人の在宅患者を複数の医師でカバーする（主治医副主治医制）診診連携の構築が進められていて、在宅医の負担軽減に繋がる事が期待される。しかし、在宅医療を実践している診療所が少なく、ネットワークが広がっていくためにも既存、新規を問わず開業医の先生方に外来診療、往診の延長として在宅医療にも目を向けてほしいと思う。研修医の皆さんには積極的に在宅医療を体験する機会を持ってほしい。そして将来、在宅医あるいは連携医として在宅医療を支える医療者が増えていく事を強く願う。



クリニック全景

原稿募集！

「若手コーナー」(1,500字程度)の原稿を随時、募集いたします。開業顛末記、今後の進路を決める先生方へのアドバイス等についてご寄稿下さい。